

紙上講座 Ⅱ

八十四年ほど前、花輪駅から小中大滝への道々の記 最終回

〔岩澤正作氏著『黒川峡中小中川溪谷探勝記』より〕

講師 藤井 実さん（東町花輪）

三分ばかりで東沢を渡り間もなく桑園を見字し「字足越」の部落にでて、四時三十分「オツケ」橋に着く。正に往復三時間を要した。

帰路、坂本家にて茶菓のもてなしを受け、五時に坂本家を後にした。

小中溪谷の美を味いながら、同行三人で勝手な熱を吐きつつ下る。

大河原で道ばたの岸壁より落下した褶曲の断片で竹瓦をおもわせるもの一個リュックサックに納めた。

久々戸橋を渡り、ほど近い傍らの豊田商店に挨拶し、まねかれ茶菓のもてなしを受けた。

母堂より子息や孫の話等を聞き、十数分でいとまごいした。

小中鉱泉湯元東陽館主渡邊得三氏は、今回私たち一行のため、入浴のサービスを申し出てくれたので挨拶がたがた訪問した。時に六時二十五分。

渡邊氏も在宅していた。氏は新里村の出身で旧知の仲なので無沙汰の挨拶もはやばやとすませ、早速旅装を解き一日の汗を流した。

だいぶ空腹だったので、夕飯を注文したが、それでは花輪発の汽車時間に間に合わないと言われた。

それならばと、雷雨にもあわず、無事予定の行動を遂行できたのは、ただただ山の神様の御加護によるものであるから、霊泉に身を清めた所で御神酒をささげ、吾等も御下りを頂戴し、

七時四十五分東陽館を出発した。

途中、ほたるなど捕らえていたので、八時二十五分ようやく花輪駅に着いた。

発車五分钟前。急ぎ切符を求めると、十分遅れて到着すると告げられた。

八時四十分発車、車中の人となると眠気を催し、約四十分間の行程も夢の中。

大間々駅で桐生支部の岡田・山口の両君と別れ、ほとらを孫たちの土産として帰宅した。

上の孫は、五歳なので昨年の「ほたる」の経験があるのだが、三歳の下の子は、光と熱とは同じものと、少ない経験上から自分なりの考えをしていると見え、

「アツイよ、アツイよ」と手を出さないところは、吾等の祖先も最初はそのようであったのかと考えると興味深いことだ。

おわりに

本年度の紙上歴史Ⅰ・Ⅱ、計6回にわたりお読みいただき、ありがとうございました。

およそ百年前と八十四年前の東の道々の記でした。

ここにあらためて、この貴重な記録を残してくださった岩澤正作氏に深く感謝いたします。

また、最後まで目をとうしてくださった皆様にも御礼申し上げますととともに、このような機会を与えてくださった東公民館長様に感謝申し上げます。

本稿を読んでいただきます。

「そう そう そうだった

そうだった」

「聞いたことがある ある」

「へー そうだったんだ」

などなどを、心に思ってくださいれば幸いです。講師編者 藤井

※追記 今まで東公民館だより

「紙上講座」に掲載された高山彦九郎氏・岩澤正作氏の注釈付版を発行する予定です。その時には、お知らせいたします。

主な注釈

紙上講座Ⅰ

「百年ほど昔、沢入駅から賽の河原への道々の記」

注釈1 沢入の地名の由来

『勢多郡東村の民俗』三頁
昭和四十一年三月三十日群
馬県教育委員会発行より）
このあたりの興味ある習俗語
として、山の下降稜線を「ソリ」
（反）といい、不毛地を指して
いる。

不毛なるが故に、不毛から土
地をソラス（反らす 転じる）
必要があつたわけで、それが切
替畑、すなわち焼畑であつたの
である。

このことからつまり「ソウリ」
は「ソラス」の名詞化であり、
そのままそれが焼畑自体を意
味するものとなったことから、
当然 現在の沢入地区は随所に
焼畑が行われてきた事を証する
ところで あることは疑いを入
れない。

※「草入」「草里」と書いたと
いう説もある。

主な注釈

紙上講座Ⅱ

「八十四年ほど前、花輪駅から小中大滝への道々の記」

注釈1 オツケ橋

里人は「オツケバシ」と発
音し「追付橋」と記している。
この名のいわれは、人々が「追
いつく」「追いつかれる」とい
うことからその名がついたと言
われている。

追付橋をわたった左山腹に高
さ二〇メートルほどの「むれ杉」
がある。現在はみどり市指定天
然記念物（植物）となっている。

注釈2 「タレハキタ」の道筋

このことについて地域に明る
い知人の説をここに記す。

「帰路については、「炭
き小屋に下り、小屋から
の斜面に登り」とあるので
瀧庭付近から左斜面に登
と、「タビハキ沢」と呼
んでいるところにでる。

岩澤氏のいう「タレハ
タ」とは「タビハキ沢」
はないか。

タビハキ沢には、白倉
の右岸の尾根付近を、足
から袈裟丸山に至る道が
り、タビハキ沢から「野
古」・「ウルシ窪」を経て
白倉川を渡ると大坂に出
ので、そのまま足越に下
たものと思われる。

現在は、車道が開設され
河川には砂防ダムが建設
れるため、昔をたどる
も難しくなっている。

また、ここに記述した
名も今では死語と化して
るところが多く、知る人
知るの世界であるかも知
ない。

地元には「小中の山は尾根歩け、
沢入の山は谷歩け。」という諺が
あるように、岩澤氏もは谷深い小
中川峡中を下るのではなく、一度
尾根筋に登り、尾根の稜線に沿っ
て白倉川へと下ったのであろう。